

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニュースレター

NO.50

2004年5月

Special to the Newsletter

アメリカ社会と階層

岩 元 巖

1950年代から今日まで、私は単独で、あるいは家族と共に、アメリカの各地で何度も暮らしてきた。学生だったり、研究員としてだったり、そしてまた客員として教える身でもあった。特に1970年代からは、常にウィスコンシン州ミルウォーキーという都市に暮らすことが多かった。ミルウォーキーは州内で最多の人口を持つ、ミシガン湖に面した中都市であるが、その北東の端、湖に臨む地にウィスコンシン大学ミルウォーキー校がある。

大学の北にはショアウッド、ホワイトフィッシュ・ベイ、フォックス・ポイントという名の村々がミシガン湖沿いに連なっている。公的には独立した村とあるが、実際はグレイター・ミルウォーキーという区分に組みこまれている郊外地である。湖に沿って走る道路が市の中心地から、大学の東端をかすめて、北にのび、フォックス・ポイントを過ぎてから西へ、つまり内陸へと走る。この道路をレイク・ドライブと称している。実はこの道路に面した地域がミルウォーキーの最高の住宅地であり、特にこの道路の北に向かって右側、つまり湖を臨む地域には現在でも19世紀以来の石造りの屋敷が並んでいる。左側も決して悪くないが、そこにはほとんど石造りの建物はなく、瀟洒な近代的デザインの住宅が並んでいる。この道路をゆっくりと20分ほど車で走れば、新旧併せた美しい、そして贅沢なアメリカの住宅を楽しむことができる。

私や、私たちの同僚が住むのは、この道路より西へ入った地域、豪華ではないが、がっしりとした石造りの建物が残っていたり、あるいは新しいデザインの煉瓦造りや木造の三階建ての家が並ぶ住宅地である。この地（ショアウッドやホワイトフィッシュ・ベイ）は主として専門職を持つ人々が住んでいる。街並みも清潔で、隣人たちも深い交際をするまでには、かなりの時が必要だが、愛想はよく、紳士的である。従って、ここにある公立学校は、ミルウォーキー市でも有数のものとなっていて、高校からの進学率もきわ

めて高い。

しかし、大学の西側にミルウォーキー川が流れているが、これを渡り、かつてのこの都市の中心となる住居区となっていた広大な地域に入れば、景観が一変する。最も便利であった筈の地域が今ではすっかり荒れはてたゲットーになってしまっている。夜などこの地域を車で走らなければならないような時は、この地に慣れた人はみな大きく迂回して、目的地に達しようとする筈である。実はこのゲットーの西には、また新しい郊外住宅地が大きく広がっていて、アメリカの中都市によく見られるドーナツ現象を成している。

このような個人的な体験を述べたのは、アメリカは建前としての「階級なき社会」とは裏腹に、他の国には見られないような厳密な階層差を有する（階級はないが、階層という曖昧な格差が存在する）ことを示したかったからである。例えば、ミルウォーキーでは初対面の人にさり気なく、「どこに住んでおられるか」と訊ねれば、その返事から、相手の社会的地位がおおよそ測り知ることができる。先に述べたレイク・ドライブの湖側に住む人は社会階層の上層の部に属するであろうし、その西側、ミルウォーキー川に至るまでの地区に住む人々は（川に近づけば近づくほど階層は下がるだろう）中の上から中の中ぐらいの階層に属すると考えてよい。そこには専門職につく人々や会社の中堅サラリーマンの人々が多い。ゲットーに相当する地域の人々でも、その上の部は定職を持つ労働者たちだし、下層の部に属する人々は定職を持たず、公的な福祉金で暮らす場合が多いのである。

「階級なき社会」という建前の国に生きていて、現実には厳然として存在する階層を意識しなければならないのは、人間にとって容易ではない。私はここ数年、20世紀前半にアメリカで活躍したシオドア・ドライサーのことを少しずつ書いているが、彼もまたアメリカ社会の中の階層差を強く意識した人だった、と考えている。彼は少年時代のことを詳さに語った自伝『あけぼの』(Dawn, 1931年)を書いている、その中でインディアナ州のウォーソーという美しい町で、自分が社会の中では中層にも属することのできない身であることを痛感している。父親は人々の雑用を引き受ける「何でも屋」で日銭を稼ぎ、母親は家計を補うために下宿人を家におく生活だった。少年期になって、いわゆる学校内の社交生活で、彼は最も不人気で、強い疎外感を抱いている。

これが、彼を16歳にしてシカゴへ旅立たせた理由でもあるし、また社会の上層へと昇っていく野心と欲望を彼の心にたぎらせた理由でもある。彼の代表作『シスター・キャリー』や『アメリカの悲劇』を読めば、この層を越え、さらに上の層へと昇っていくとする欲望を主人公たちが持つことに気づかれるだろうが、それはドライサーという作者の心に一つの執念として存在していたものの表現である。

『シスター・キャリー』の主人公キャロライン・ミーパーは、その手段はともかくとして、この上昇欲を稔らせて、より高いものを目指して向上してゆく例である。ただし、彼女には階層に対する意識があまりないから、どこまで向上したらよいのか不安であり、

その不安を暗示したまま、小説が終わっている。

一方、『アメリカの悲劇』では、ドライサーは階層の意識を非常に明確に表現している。彼は、個人的体験から当時流行していた社会進化論に共鳴した人だったから、社会の中での物質的「成功」を強者の証しである、と考えていた。しかし、同時に彼はアメリカに生まれた（あるいは来た）人間に、それが強者でない人々にも「成功」の幻想を与えてしまい、その幻想にまどわされるために、悲劇的な結末に至る、とも考えた。周知のように、『アメリカの悲劇』の主人公クライド・グリフィスは、その典型的な例である。彼は強者の素質を持たず、またそれを育まないまま社会的階層を昇ろうとしたために挫折しているのである。階層ということを考えて表現すれば、階層差を「踏みこえる」("transgress")ことができなかつた男がクライドであった。

こういうアメリカ社会の階層の話アメリカで話したら、友人がポール・ファッセル著の『階層』(Paul Fussler: *Class*, 1983) を送ってくれた。ファッセルはペンシルヴァニア大学の教授で、アメリカの社会階層について実に面白く(ユーモアまじりで)、そして精密に書いている。彼はアメリカ英語に「階級制度」("caste")という言葉があつて欲しい、と述べるくらいアメリカ社会には実に厳しくかつ曖昧な(これが大切である)階層差がある、と断言する。ファッセルはその階層は九つあり、次のようになる、と示す。

- | | |
|----|-------------------------------------|
| 上層 | 最上層、世間から見えない層 (Top out of sight) |
| | 上層 (Upper) |
| | 上流中層部 (Upper Middle) |
| 中層 | 中産層 (Middle) |
| | 上位勤労者層 (High-Proletarian) |
| | 中位勤労者層 (Mid-Proletarian) |
| | 下位勤労者 (Low-Proletarian) |
| 下層 | 貧困者層 (Destitute) |
| | 底辺層、世間から見えない層 (Bottom out of sight) |

ファッセルは各層の特質を家屋、調度、社交、教育、年収などあらゆる面から説いているので、階層に興味を持つ人に有益この上ない。だが、肝心なのは、ただ読んで面白いだけでなく、アメリカ社会では階層差が厳しく、それを越えるのは至難の業だが、その格差の基準が曖昧である(貴族制度とか身分制度が当然無いから)ために、アメリカの人々は自らの属する階層に不安感を常に抱いている、という指摘である。アメリカで暮らすたびに、必要以上に向上心をかきたてられる秘密はこのあたりの社会心理からくるものであろう、と私は考えている。

(筑波大学・麗澤大学名誉教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (41)

Dixie (米国南部諸州) 南北戦争が始まった1861年頃から、南部諸州では鋳貨は全く発行されなかったが、多様な紙幣が大量に発行された。紙幣の発行は北部以上に戦費調達の意味をもっていた。税収や輸出入関税は全然役にたたなかったからだ。その結果、南部の物価は急騰し、悪性インフレの様相を呈するようになった。あるジャーナリストは次のような話を伝えている。「戦前はお金をポケットに入れて市場に出かけ、買った物をバスケットに入れて帰ったものだが、今はバスケットにお金を入れて、ポケットに物を入れて帰る」。乱発が因となって、価値を全く失った南部の紙幣は、一般に *shinplasters* (こうやく) と呼ばれた。しかし、南部紙幣のなかには、それほど減価しないドルもあった。一例はニューオーリンズの *Citizens' Bank* (市民銀行) が発行した *ten-dollar bill* (10ドル紙幣) である。この紙幣は裏面にフランス語で10を意味する *dix* (ディックス) という文字が印刷してあったことから、*dixies* (ディクシー) として知られるようになった。この紙幣が使われていた土地という意味で、*Dixie* という語は最初ニューオーリンズ、ついでルイジアナ州、最後には南部諸州全域を指すようになった。

だが、この *Dixie* あるいは *Dixieland* という名の由来については別の説がある。一つは、18世紀にマンハッタン島の奴隷所有者 *Dixy* が地元を持っていた土地 *Dixy's land* に因んで *Dixieland* と名付けられたという説である。彼は奴隷たちに対して非常に親切な人であったことから、後の北部での奴隷制廃止運動の高揚のために、奴隷たちがニューヨークから南部へ移住した時でも、かつての *Dixieland* を彼等はいつまでも偲びつづけたという。もう一つは、南北戦争時代になって、自由州と奴隷州の境界線を指すようになった *the Mason-Dixon Line* (メーソン・ディクソン線) の *ディクソン* がもともになっているという説。ついでにすると、*the Mason-Dixon Line* という語の起源は古く、植民地時代にさかのぼる。これは、1763年から1767年にかけて 英国の *Charles Mason* と *Jeremiah Dixon* という2人の測量師、天文学者が定めた州境界線のことで、彼等はペンシルバニア州とメリーランド州の間で古くから揉めていた境界紛争に終止符を打つために、英国から呼ばれたのだ。広い荒野を4年がかりで測量した結果、境界線が定められ、2人の名に因んで *Mason and Dixon Line* と呼ばれたのだ。しかし南北戦争時代になると、もとの意味は消え、この言葉は自由州と奴隷州の境界線を指すようになった。

Dixie という言葉をアメリカ中に広めるのに大きな影響を与えたのが、1859年に北部人の *Daniel Decatur Emmett* がパレード用に作曲した "*Dixie* " という歌である。この曲は瞬く間にアメリカ全土に広がり、まもなく南部同盟の非公式の国歌として採用され、1861年2月18日のアラバマ州モンゴメリーで挙行された *Jefferson Davis* の大統領就任式でも演奏された。また *Lincoln* 大統領は *Lee* 軍降伏の情報を聞くと、この曲を演奏するように命じた。ディキシーランド・ジャズ (ニューオーリンズで確立されたジャズ音楽の一形式) という意味が *Dixieland* に入ったのは1910年代である。作家 *Snclair Lewis* は *It Can't Happen Here* (1935) のなかでこの言葉を用いている。「演壇ではバンドがディキシーランド・ジャズを演奏した」。

Potato (じゃがいも) 1400年代初期、インカ帝国が歴史の舞台に登場する頃には、アンデス地域の住民はすでにじゃがいもを人為的に栽培していた。1530年代にペルー人を

征服したスペイン人がじゃがいもを本国に持ち帰ったのは1570年頃だ。この新しいアメリカの植物に対するスペイン人の評価には、一応称賛が反映されている。たとえばある記事には「じゃがいもは、内部がゆでたくるみのようで、非常に良い食べ物だ」とある。だが、1500年代後半、この作物がヨーロッパに紹介されると、親戚関係にあるさつまいもと違ってその称賛の地位から引きずり下ろされてしまうのだ。人々の念頭に根菜類は身体のバランスを失わせ、皮膚のただれや腫瘍といった病気を引き起こすというイメージがこびりついてきたからだ。イギリスを例にとると、1662年にロンドン王立協会が飢饉の対策に適した作物としてじゃがいもの価値を指摘したが、塊茎類への連想から一般大衆はこれに全く同意しなかった。尚Shakespeareが*The Merry Wives of Windsor*の中で"Let the Skie raine Potatoes."と言っているpotatoesは「さつまいも」のことである。

そうしたなか、アイルランド人はじゃがいもを主食として受け入れた最初のヨーロッパ人であった。いつどのようにしてアイルランドに入り込んでいったかについて、詳しいことは不明だが、少なくとも1600年代後半にはアイルランド人はじゃがいもに愛着を深めていった。アイルランドの痩せた土地でも早く成熟し、乾燥すれば長期間保存が利き、調理が簡単だったからだろう。この栄養価の高い作物が安定して供給されるようになると、アイルランド人の人口が増えはじめる。

北アメリカのじゃがいもの一番古い記録は1719年であるけれど、この植物は1719年以前に北アメリカに伝わっていたらしい。というのは、ペンシルベニア植民地の創始者であるWilliam Pennは、入植を希望する移民たちに書いたこの地の作物を紹介した手紙で、「じゃがいも」を明記しているからだ。この植物をアメリカの土壤に定着させる上で寄与したのが、アイルランドおよびスコットランド系の入植者であった。もう少し云うと、長期間に及ぶイギリスの圧制の結果、アイルランドの土地の大部分はイギリス国教会に属する地主が所有し、1700年の時点ではアイルランド人は国土のわずか14%しか所有していなかった。即ち彼等は常に厳しい生活状態におかれていた。それ故新世界にイギリス人が定住しはじめると、アイルランド人やアルスター地方（アイルランド北東部）のスコットランド人はアメリカに渡っていった。当然のことながら、じゃがいもも彼等とともにアメリカの北部にある植民地に広がっていった。独立戦争が始まると、大陸会議は、「兵は（中略）じゃがいもを週3回食べるべし」と定めた。George Washington やThomas Jeffersonのような建国の父祖たちもこれを栽培した。ちなみにJeffersonは、じゃがいもを「アイリッシュ・ポテト」と呼んでいた。また彼はホワイトハウスの客にフライドポテトを出した最初のアメリカの大統領であった。当時のアメリカでも地域によっては「じゃがいもには毒があり、食べる時はかならず煮沸する」と考える風潮があつことを思えば、Jeffersonはかなり大胆なことをやったものだ。

前記のように、ヨーロッパ諸国のうち、じゃがいもを最初に主食としたのはアイルランドだが、この作物が壊滅的な打撃を与えたのもまた、アイルランドだった。1840年代にじゃがいも伝染病が猛威をふるい、100万人以上が飢えに苦しみ、死んでいった。生き残った人々の多くはアメリカへ移住したが、彼等は貧しく不熟練であったので、土着のアメリカ人が描く彼等のイメージは、大酒と喧嘩を好む姿であった。

(新井正一郎・天理大学国際文化学部教授)

カリフォルニア州における
初等中等教育事情
—ロサンゼルス滞在から—
平井 明代

2003年春、アメリカ西海岸に位置するカリフォルニア州の大都市ロサンゼルスに2ヶ月間滞在した。その間、我が子を現地の中学校 (Middle School)に通わせた。2003年はカリフォルニアが世界から注目された年でもある。グレイ・デービス州知事がリコールされ、11月、共和党から俳優として知名度を誇るアーノルド・シュワルツネッガー氏が新知事として当選を果たしたからだ。その彼も、オーストリア移民であり、まさに移民の多いカリフォルニアを代表している。

カリフォルニア州政の課題は、教育問題、犯罪対策、環境問題、中絶問題、統規制問題などがあるが、州民の関心が最も高いのは、教育の水準を上げようという課題に集約される。その問題に気づかされる出来事が起こった。出張先のUCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) から最も近い公立中学校に2人の子供を通わせることにした。入学手続きのため出向いた初日に驚いた。始業時間前であふれかえる生徒の中に一人も白人アメリカ人を見かけなかったのだ。

1. 人種比率

アメリカの人種構成を2000年度国勢調査で見ると、白人69.1%、ヒスパニック12.5%、黒人12.1%、アジア系3.6%、先住民0.7%、その他0.2%となっている。つまり10人中7人は白人ということになる。しかし、カリフォルニアに限っていうと、この数字は全然当てはまらない。

たとえば、カリフォルニア州ロサンゼルス市 (county) の居住者の比率では、ヒスパニック (42.9%) が白人 (39.8%) より若干多くなっており、続いてアジア系 (12.3%)、アフリカ系 (1.9%) となっている。さらに、ロサンゼルス市内の学校区別に見ると、全米で2番目に大きなロサンゼルス統一学校区 (全生徒数73万5058人) の場合、メキシコから流れ込んだヒスパニックが実に71.4%を占め、白人はたった9.6%と、ヒスパニックの多さが顕著になっている。ちなみに、子どもたちが通った中学校は、白人はほん

の数十名で、ほとんどの白人は、隣接していた私立など別の学校に通っていたようだ。授業中は、スペイン語なまりの英語を聞く。休み時間は、まったくわからないスペイン語が飛び交う。病院の案内、広告、電話の請求書など至る所に英語とスペイン語の二ヶ国語表示がなされている理由がわかった。

また、カリフォルニア州のオレンジ市では、市全体ではヒスパニックが60.1%、白人が18.2%、アフリカ系11.0%、アジア系7.8%で、ヒスパニックが圧倒的に多く占めるが、その中のアーバイン統一学校区に絞って見ると、白人 (54.7%) とアジア系 (32.4%) が大多数を占めている (Educational Demographics Office, 2002)。まさに、カリフォルニアは人種のサラダボールだ。

2. 学校ランキング

日本では、週5日制になり、新学習指導要領で規定された学習内容が以前より大幅に削減される中、従来どおりに指導を行う私学、特に、6年間学ぶ中高一貫校の人気のますます高まってきたが、全国共通して小・中・高の就学期間はそれぞれ6年、3年、3年と決められている。アメリカでは、小学校はキンダーから5年生まで、あるいはキンダーから8年生までなど学校によって期間も異なる。それに準じて中学も6年生から3年間、あるいは7年生から2年間などさまざまである。高校は9年生から12年生の4年間である。

このようなさまざまな形態に加えて、教育内容もかなり各学校の校長の裁量や担当教師の判断に任されている部分が大きく、学校間格差が激しい。その格差の目安となるのが、API (Average Performance Index) と呼ばれる数値である。これは、カリフォルニア・スタンダードテスト (CSTs) やカリフォルニア・アチーブメントテスト (CAT/6) などのテストスコアを学年別に200から1000の数値に置き換えたもので、学校別に算出される。このAPI制度は、1999年、カリフォルニア州議会が、生徒の成績向上は、それぞれの学校が責任を持って達成しなければならないという (California's Public School Accountability Act) 法律を可決し、その一環として導入されたものだ。

APIは、2003年より小学校と中学校では80%

がCSTsのスコア、20%がCAT/6のスコア、高校では73%がCSTs、15%が高校卒業試験（High School Exit Exam）、12%がCAT/6のスコアで決定され、このスコアが各学校の成績やランキングに繋がる。3月に入学した2人の子供たちも、このCAT/6を受けさせられた。英語の拙い彼らにとっては、算数以外は、かなり難しかったようだ。大いに、この中学校のAPIスコアを下げるのに貢献したのではと危惧したが、最初のCSTsを受けていないのでAPIスコア算出時には除外されたものと思われる。

このように、アメリカに来てまだ間がないESL(English as a Second Language)の生徒を多くかかえる学校は、当然APIスコアも低くなるだろう。また、子供の教育レベルは、親の教育レベルや収入に左右されるので、低所得層地区の学校はかなり不利になる。我が子が通った中学も所得申請で、給食チケットを発行してもらい無料で昼食をカフェテリアで取る生徒たちが圧倒的に多かったと話していた。

学校によって人種構成や父兄のバックグラウンドに大きな差があるカリフォルニアでは、似たような環境の学校間によるランキングも発表している。ちなみに、ロサンゼルス統一学区のランキングはかなり低いが、大きな日系コミュニティが位置するトーランス学区は、どの学年も州全体の平均より10ポイント前後、日系企業の進出が進むアーバイン統一学区は、20ポイント前後上回っている。

3. ニヶ国語教育

ヒスパニックが多く占めるロサンゼルスでは、長年人道的対策として、英語とスペイン語のニヶ国語教育が行われてきた。しかし、依然ヒスパニックの落第率(dropouts)が高く(1995年の調査では、25年間で平均30~35%)、落第した生徒の8割ほどが英語をうまく話せないとの報告もあり、ニヶ国語教育は失敗であったと考えられているようだ。この背景には、スペイン語のクラスに隔離され、英語を学ぶ機会を大幅に奪われたなど、すべてのニヶ国語教育が原因で英語の習得率が低い、あるいはヒスパニックの落第率が高いとは言えないのだが、カリフォルニア州では、1998年6月に、20年近く続けられたバイリンガル教育の廃止が決定され、代替教育課程として一年間の英語集中授業に移行した。

ロサンゼルス市では、この報告を受けて、1999年から、チャーター・スクールを除いて、すべての公立小学校で、すべての教師は英語で授業を進める方針がとられるようになった。しかし、実情は、子供たちの入ったクラスでは、授業中必要に応じて随時、先生がスペイン語で通訳していた。

4. 教育改革とチャーター・スクール

ロサンゼルスでは、教育改革は永年の課題であるが、「親の力」によって「学校」を良くしていこうと、規模の大きな草の根の市民運動が起こっている。ロサンゼルス統一学区では、“Beyond the Bell Branch”というプログラムで放課後や土曜日にクラスを無料で提供しているという。実際、そのプログラムの一環かどうかは定かではないが、放課後、いくつか苦手な科目の補習授業が開かれ、子供たちも週一度のESLの授業を申し込んだ。ただ、内容は期待はずれだったようだ。

現在、最も注目すべき学校制度の改革にチャーター・スクールがある。チャーター・スクールとは親や教員、地域団体などが、州や学区の認可(チャーター)を受けて設ける学校である。学校運営や教育実践における独立性、自律性が与えられ、州や学区の法令・規則の適用が免除されるが、成果が上がらなかったり、運営において問題がある場合は、閉校に追い込まれる。

1991年にミネソタ州で最初のチャーター・スクール法が成立し、その後、全国に広がった。2000年秋現在、学校数は36州とワシントンDCで2073校となっており、内58%が小学校、20%が中等学校、22%が小、中の学年を含む学校である。カリフォルニア州だけで見ても261校ある(The Center for Education Reform, Charter Schools: Changing the Face of American Education, 2000)。

比較的新しい教育モデルのために、教育成果が公立学校より上がっているかは、結論付け難いが、教育改革を進めている日本でも注目されている。米国では、この他にも、税金で私立校に通えるパウチャー制度、成績優秀なギフテッドの子供を受け入れるクラスや、渡り間もない児童に必要なESL初級クラスなど、クラス構成

(7頁から続く)

の仕方が通常とは異なるマグネットスクール制度がある。

今年2004年、再度ロサンゼルスに10ヶ月間、我が子と滞在することになった。今回は単にUCLAから近距離という条件だけではなく、もう少し入念に検討し子供に合った学校を選ぶ必要があると痛感している。(筑波大学助教授)

* * * * *

「酒本真理子賞」

3 学科の最優秀論文執筆者に授与

天理大学アメリカス学会では、毎年、国際文化学部の英米、イスパニア、ブラジルの各学科の最優秀卒業論文執筆者に対して「酒本真理子賞」を授与している。昨年度(2003年度)の「酒本真理子賞」授賞式は、去る3月22日卒業式式典直後に開かれ、上記3学科の各学科教員・卒業生全員が参列した学科別の集会席上、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書券2万円分が手渡された。

英米学科：佐藤 有

“Public School Prayer Controversy in the United States: *Engel v. Vitale*”

[英語論文] (「アメリカ合衆国の公立学校における祈りをめぐる論争—エンゲル対ヴィタレ裁判—」)

イスパニア学科：太田千夏

「少年たちの『コムニタス』—メキシコの天理教コミュニティにおける『こどもおぢばがえり』の意義と機能—」

ブラジル学科：森本昌宏

「ブラジルにおけるプロアルコール産業についての考察」

編集後記

◇天理大学アメリカス学会では、学会出版の第2弾として昨年12月に『アメリカス

学の現在』を行路社から刊行した。天理大学内外の学者16名による共同執筆による同書は、2000年3月に発刊された『アメリカからアメリカスへ—欧米という発想を超えて—』に次ぐアメリカス学会編の啓蒙書で、今回はこの4月から開講されているヨーロッパ・アメリカ学科の専攻科目(全学部)に開講)「アメリカス概論」のテキストとしても活用されている。

『アメリカス学の現在』をご希望の方は、アメリカス学会までご連絡ください。1冊2,100円(送料別)にてお分け致します。

◇昨年12月にスタートしました当学会2004年度の年会費(一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円)を未納の会員の皆様は、至急、郵便振込取扱票にて指定口座(下記参照)宛にお振り込みくださいますよう、宜しくお願い致します。

(TK)

当学会の年会費は、一般会員5,000円です(入会金はありません)。納入は、郵便局で下記の口座にお振り込みくださいますようお願い致します。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口30,000円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター
(No. 50 : 2004年5月11日発行)

編集人：新井正一郎

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

E-mail: americas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/